CHAPTER.3

# 想いを引き継ぐ―
# 燃える駒形峰

さまざまな人たちの協力により、50年以上受け継がれてきた伝統行事「平泉大文字送り火」。支えてくれている人たちがいることを知ってみれば、暗闇の中赤々と燃える送り火の幻想的な景色が、また違ったものに見えてくるかもしれない―。

## 行く夏を惜しむ 古都平泉の静かな夜

点火から10分ほど経過すると、町内から望む駒形峰の山肌には「大」の字が赤々と浮かび上がった。見物スポットである高館橋や高館義経堂周辺では、訪れた人たちが行く夏を惜しみながら送り火を眺め、先祖や東日本大震災の犠牲者らを供養するため静かに手を合わせていた。

## 新規の行事ではなく 意義ある行事の「復活」

第1回目の平泉大文字送り火が開催された際に、平泉観光協会長を務めていた故・佐々木実高さんは行事開催の意義について「自ら信仰の先達者であった清衡公は、必ずや京都五山の送り火行事も移して、仏都平泉の東山と名付けた束稲山の一角に、『大文字送り火』をたき供え、その西方すなわち中尊寺の金色堂、毛越寺の観自在王院大阿弥陀堂、あるいは無量光院に向かって赤々と燃え立ったことと思います」と記している。つまり平泉大文字送り火は、新規の行事ではなく、800年前にやっていたと思われる行事の「復活」と位置付けられている。

昔から変わらず存在している束稲山を800年前の姿によみがえらせるため、山にもう一度火を灯した。そこには清衡公の想いをくんで動いた先人たちの情熱があったのだ。

## 伝統ある行事を 後世に伝えるためには

平泉大文字送り火は、長い時間の中で、多くの人たちの手によって受け継がれてきたものである。それは時として、地域を取り巻く環境の変化とともに、やり方などが変わっていったかもしれない。しかしその根底にある「地域への想い」「開催する意義」は変わらないはずである。

地域の特色ある伝統行事において、少子高齢化による後継者不足で存続の危機にひんしているものもある。その大きな要因となっているのは「無関心」ではないだろうか。伝統ある行事を後世に伝えるためには、まずは行事を知ってもらうことが大切だ。知り、実際に自分で体験することで行事への思い入れが一層深くなる。先人たちが復活させた行事、そこに込められている想いを受け継ぎ、後世に伝えていくことが私たちの務めであり、誇りである。

【特集】―受け継がれる想い―大文字送り火　終わり